

『ラスト・オーダー』が聴こえる

佐伯 恵子

1

二駅隣の歯科医院で治療をすませ、桜堤駅に帰りつくと、晩夏の夕焼空がオレンジ色に染まっていた。駅舎と雑居ビルの間の道の行く手の車が行き交う県道の上空に思いがけない美しさが広がっている。昌雄と結婚し、この町にもう五十八年も住みついているといふのに、こういう駅附近の風景などゆっくりと眺めたことはなかった。空を仰いだのは久しぶりという気がする。ここに立って一刻々々の色彩の変化を眺めていたい。

昌雄は、今日は町会のバス一泊旅行に参加して出かけた。若い頃は旅行が趣味の一つであったが、八十五歳となった今は年に一、二度、日帰り旅行に行くだけとなった。同年齢の明子は狭心症で二度入院し、その後は足が弱って旅行にはめったに行かなくなっている。

明子は、いつものようにその通りを行こうとして、ふと、この間、昌雄について通り抜けてみた駅裏の暗い道を思い出した。その小路とでもいった小さな道は、つい最近知らぬ間に表通りの商店と商店の間に入り県道に抜けられるようになっていた。昌雄はそういういかかわしいような道が好きだ。「こっちの方が近いよ」と、さっさと歩いて行ってしまったから、しかたなくついて行った。真っ暗な所を数メートル歩き駅舎に組みこまれた飲食店が何軒か並んでいる所に出た。片側が自転車置き場となっていて数十台が犇めいて置かれている。駅附近の放置自転車がここに移された訳か、と納得した。通りすがりの三軒目か四軒目の店から聴いたことのある曲のメロディが流れてきた。あれは、荒木とよひさの、『ラスト・オーダー』だ、と気がついた。足を止められた。ラジオ深夜便の歌で、この春に聴いた。甘いメロディが耳につく。「ラストオーダー、もう一杯だけさ」、ガラス窓越しに数脚のテーブルが並び、若い男と女が離れた席に一人づつ、ぼつんとかけているのが見えた。昌雄が県道の横断歩道を渡り歩道の向こう端に立って待っている。明子は足が遅いからいつも置いていかれてしまう。昌雄は明子の歩調に合わせてたことがない。自分が無事に横断することで精一杯なのだ。車をやり過ぎしていると、今しがた聴いたメロディが、ふいに蘇えた。ガラス窓から見えた男と女の光景に気を奪われた。あの人たち、相手を待っていたのだろうか。暮れゆくガラス窓の方をじっと見つめて動かなかった、二人とも。私たち、ああいう風に待ち合わせをしたことがあっただろうか。私にああいう青春があったのだろうか。信号が変わり向こう側に渡ると、そんなことはすぐに忘れた。今、それを思い出したのだ。明子は、この間のその小路を通って行こうと思っていた。

目が慣れたのか今日はさほど暗そうな、とは思わなかった。足を踏み出そうとした時、改札口の方から乗降客の一団が流れてきた。

「山根さあん」と呼ぶ人がある。見ると平山俊之であった。少々季節外れの白いパナマ帽子を洒落た風に被っている。昌雄の社交ダンス仲間だ。昌雄や明子と同年齢だが、ストライプ、ライトグレーのジャケット、背筋の伸びた、きびきびした容姿は遠目に七十歳くらいとしか見えない。

彼とは、老人福祉施設『憩いの家』の仲間と連れ立って、中国料理のチェーン店に行っ

たことがある。明子は『憩いの家』で短歌会に参加しているから彼を何度も見かけてはいる。

新しい道の入口に立っていると、彼が寄ってきた。

『バーミヤン』で、『一緒しました』

明子が言うのと、ちよつと辺りを眺めて、

「今日は、ご主人は」

と、訊いた。

「町会のバス旅行に出かけました」

彼は、えっ、とおかしそうな顔になり、

「町会の。えーっ、うちのも行っただんですよ。書道の仲間のメンバーと」

「そう」と明子はなぜともなくおかしくなって笑った。

「それで、今日は卓球とかコーラスの帰りですか」

「そう、卓球」

彼は、暗がりの前方の店に目をやって、

「じゃあ、丁度いい。その辺で食べて行きましょうか」

と、唐突に言った。気さくな言い方に釣られ明子はすぐ承諾した。

安直な普請の店が並び、三軒目のラーメン店に入った。夫婦かもしれない中年の男と女が立ち働いている。他には客がいなかった。明子が、味噌つけ麺、彼がチャーハンを注文した。彼は食べ物など、まるで頓着がない、といった様子で食べている。

「平山さんはダンスの会で一番もてるんですね。うちの人が言っていました」

「いや、もっと上手いのがいる。後から入ってきた。上手い、彼は」

きっぱりと言う。この人は潔い人らしい。老人同士がつき合うにはお互いの好みを心得ておかなければならないと思っている。明子はまた訊いた。

「いつだったかしら、おとしだったかな、『憩いの家』の文化祭で歌った時の歌はすばらしかったわ。一人だけクラシックの曲で。あれはどうして、どこでおやりになっていたのですか」

「いやあ」

彼は嬉しそうな顔で謙遜の態となった。

「十年ほど前までオペラの会に入っていて。音大の講師が指導に来てくれていたんですが、第一テノールがいなくなつて解散してしまつたんです」

「そうですか。あれはよかったわ。プロになろうと思ったことがあるのではないかと思つた。こんな人がどうしてこんな所で、つて」

いやあ、いやあ、と彼は照れた。

「菜園とかガーデニングとかは。奥様は」

「うちのは書道一本やり。先生に代わりをやらされてふうふう言っている。今、やめろと言っているところ」

明子は声を立てて笑った。

あと、ペットのことだけを訊いておこう。ずいぶん親しくなつたつもりでいた友人に、うっかり猫の話をして口を噤まれ、以来敬遠されてしまつたことがある。

「平山さんの所は犬とか猫とかは」

「前に犬がいたけど寿命で死んでしまった。僕は犬は好きだけど猫はだめだ。猫はすり

寄って来るでしょう。あのすり寄ってこられるのがどうも」

彼らしい言い草だ。それが可愛いと思う人もいるのに。凡ての仕草がその生き物の生きるための知恵なのに。この人、単純な人なのかな。

彼がふいに、おもしろおかしいといった顔になった。

「僕の姉というのが特別の猫好きだった。若かった頃は、わざわざ四季野公園の野良猫に餌やりに行っていたんだから」

はっとした。四季野公園、餌やり、まさか。

「僕の四つ年上でね、自分の子供よりかわいいんだ。猫好きの女性というのは、あれは特別だね」

四歳上、まちがいない。桐子だ。この人の姉が桐子だなんて。

「そのお姉さん、桐子さんで方でしょう」

「えっ、知ってるの、これは驚いた」

平山が頓狂な声を出し目を丸くした。

「ずっと以前、もう昔よね、その公園の餌やりに一緒に行ったわ」

へえっと平山は感心した。六十年以上も前の、平山も二十歳代であった頃の話が引き出されたことに感じ入っているらしい。

2

明子は当時、有楽町の駅から歩いて十分のドイツ資本の商社に勤めていた。外語大在学中と就職してすぐとの三年の間に相次いで両親を失い、独りとなっていた時である。母は夕刻台所で倒れた。心筋梗塞でその夜のうちに亡くなった。父は天袋から地図を取り出そうとしてベッドの柵を踏み外し転落した。その時ベッドの鋼材の脚で頭を打ち三日後に亡くなった。定年退職の三年前五十二歳の年齢であった。

ビルの商社のオフィスからは皇居の屋根の一部が見え樹木の緑がいつも黒ずんで見える。堀を隔てて四季野公園がある。オフィスには十数名の社員がいた。社内では英語しか使えず、私語を交わすことはできない。日本人の女子社員は六名いたが、その頃はまだ親しい人はいなかった。午後四時の退社の時、更衣室のロッカーから毎日何か荷物を入れたトート・バッグを取り出している人がいた。その人は千田桐子という名前で、キリコという名の響きがよく、まさきに名前を憶えた人だ。ある日ビルの外に出てから追いついて訊いた。

「何か、お稽古事に行かれていますか」

桐子がふりむくと、「あ、これ」という表情でバッグに視線をやり、ほほ笑んだ。明子と肩を並べるとゆっくりとした歩調になる。

「これからその辺でショッピングとかすませて、それから公園に行つて猫に食べさせるのね。あなたは猫は嫌い」

「いえ、飼ったことはないけど。父の転勤でいつもペットは飼えなかったから。でもいつか落ち着いたら飼いたいと思っていたわ」

「そう、一緒に行つてみる」

「ええ。はい」

いつの日か、外に犬がいて中に猫が一匹いる家に住みたいと思っていた。桐子はちよつと考えていた。

「今日はホールに寄つてから行くけど、いい」

と訊く。

「ホールって。ああ、どうぞ」

ホールというのは、ダンス・ホールの事らしいと分り冒険に出かけるような気分になった。社交ダンスは学校でダンスのクラブのメンバーから時々誘われて踊ったことはあるが、街のホールで踊ったことはない。銀座通りから新橋へと歩き、一本裏通りの大きなホールに桐子が入って行った。ドアをあけると濃密なムードが醸し出されている。夢中で桐子についていく。更衣室で、桐子はバッグから大きなブローチを取り出し襟元につけた。眩しい煌めきがボーイッシュなスタイルのイメージを一変させた。数十組の男女が踊っている。桐子は毎曲、二、三人の男に誘われた。明子も誘われて踊った。ブルースとタンゴ、ワルツ、ルンバが繰り返される。

明子は桐子にばかり目を奪われた。曲が止み一同が、さあーつかと壁際に引き揚げた時のあの一瞬の静寂、桐子は背中を壁に凭せあの大きな澄んだ目でまっすぐ虚空を見つめていた。少しも笑ってはいない。彫りの深い目鼻立ちの毅然とした容姿が貴婦人のような、と思われた。ホールを出て公園に向かう道中、桐子は笑顔で言った。

「亡くなった亭主よりましな男がいたら結婚してもいいと思っているのに」

二人で千足屋に寄ってジュースを飲み一息ついてから公園に急いだ。あれは六月の日の長い時であつたからホールに立ち寄れたのだ。だが、その後は一度も誘われなかった。あれは、この私のための歓迎会であつたのかもしれないと明子は思っている。

桐子は戦死した夫のことを話してくれた。夫とは学生時代からのつき合いで二学年以上、桐子が卒業するのを待つてすぐに結婚したという。小田原の家には両親と義妹二人がいた。昭和十八年の結婚間もなくの時に召集令状が配達されて戦地に行かされた。男の子が生まれ父親の顔を知らずに育つ。夫は南方戦線、東部ニューギニアで戦死した。終戦の翌年三月に戦友であつたという静岡の人が家を探してやってきてくれた。義父母と桐子がいた。

「極限状態になると人間の尊厳はなくなる。畜生にならなければ生きていかれない。仲間が死ぬと弔うどころか衣類を剥ぎ取り置きざりにして行軍しました。命尽きた死体が次々と捨てられていきました。誰もが茫然として何にも感じなくなるんです。虫という虫は凡て食べました。蛇も蜥蜴も一日がかりで捕まえて食べました。木の芽、葉っぱも。栄養失調だから何でも食べるんです。雨水を貯めて飲んだり。私は生き延びてニューギニアの現地人に助けられ奇跡の生還をした訳です。でもいつも一緒だった千田君は死んでしまった。息のあるうちにここの住所を聞きました。奥さんや親にきつと報告に行くからと約束しました。これで報告ができた。よかった」

戦友は放心の態でしばらく立ち上がれないでいた。

義父は体を硬直させて動かず、義母は畳につつ伏して泣き、桐子は自分の部屋に駆けこみ子供を抱きしめて泣いたという。戦友がいつ帰ったのか誰も知らなかった。

「私は働いて子供を育てようと実家に帰ってきたわ。子供の養育を両親に手伝ってもらい今の会社に勤めたのね。千田の家は義妹二人がいて人手が足りている。義妹たちが嫁いで行ってしまったら戻ってくるからと約束してあるわ。いつだったか終戦から大分経った頃に、十一センチ三ミリ四方の桐の箱に入った金杯と黒塗りの小さいケースに入った桐の花のデザインの勲章が贈られてきたわ。箱をあけてあんな誰、と私言つてやったの。それがうちの人の代わりだなんて思えない」

桐子は、その話もその時話してくれたきりだ。

そうか、桐子は夫を亡くしてまだ泣いているのだ。もう何年も。彼を想つては猫に食べさせてやっているのだ。

「腹を空かせては辛かろうて」と呟きながら。

四季野公園には八ヶ所のエリアに猫が四十匹ほどいる。早朝とか夕刻に自分のお気に入りの猫に餌をやりにくる人もいる。猫たちは気の合った同士で茂みに隠れて暮らす。大方捨てられていった猫だ。その頃はまだキャット・フードなどはなかった。桐子是小田原の婚家先で懇意にしていた業者に頼んで、築地市場に卸しに行った帰りに鰯とかアヲを置いてもらっていた。それを煮てはきつちりと袋に詰めてくる。キャット・フードが日本で生産されるようになったのはその後二十年を経た昭和四十年代の後半なのだから。明子は猫たちに馴れて一つのエリアを守った。桐子が餌を分けてくれる。数匹の猫が躊躇り一心に食べているのを眺めると気持が癒される。桐子の夫への思慕を思いやり、それから心の奥にしまっている父母と話している。父と母を思い浮かべるといつも涙が流れた。

暮れ始めると気が急いた。ほら、早く食べてと猫たちに言う。閉園後の人っ気のなくなった時刻、荒くれた男たち五、六人が大型犬を連れてきて放す。傍若無人にドカドカとやってくる。彼等が引き揚げた後、深夜には共同便所の陰に同性愛者の男たちが集まるというのだ。餌やりの仲間たちが話していた。

「お医者とか大学教授が多いらしい」

公園に国鉄労組と日教組、農業、印刷、建築、医療等、各種労組の集会が催されるようになったのはその頃からだ。

四季野公園の思い出は明子の戦後であった。二十六歳の時、民主活動の講演会で知り合った昌雄と結婚することとなり退社して桐子にも別れを告げた。桐子は深い眼差しでじっと見詰めて言った。

「自分を見失わないようにね。あなたのエリアはみんなやるから心配しないでいいわ」
桐子とはそれきり会っていない。

3

平山のお皿も空になっている。

「さっき隣の店の看板に珈琲と書いてありました。漢字で珈琲と書かれていると誘われるわ。寄って行きましょうか」

はあ、そうですか、という顔で頷く。レジで支払いを済ませると先に立って隣に入って行った。

外は藍色に暮れてしまっている。少しく瀟洒な造りの店である。窓辺の小さな円卓に向き合ってかけた。井上陽水の「ジェラシー」の歌が低く流れている。他に二組の客がいた。明子は、まっさきに訊いた。

「お姉さんはお元気なんですか」

「去年亡くなりました、十一月に。あと二ヶ月で一年です」

「そうですか、去年」

桐子が亡くなった。もう会えない。

「一周忌には僕も行くつもりです。小田原の『だるま』って店でいつもやるんですけどね。姉の所は亡くなった夫もその父親もそして息子も市役所に勤めましたから丁度その向の『だるま』で役所を眺めながら、って訳です。あの家の法事にはもう何回も行った」
「息子さんはもうお幾つでしょう」
「ああ、もう七十に近いのかな。とつくに定年退職して夫婦で孫の世話をやいていますよ」

「お姉さんはずっと小田原にいらしたんですか」

「そう。小田原の千田の家に嫁いだのですが、夫が間もなく戦死したので、子供を連れ

てこっちに帰ってきていたんです。昭和三十二年に千田の義父がくも膜下で倒れ記憶の所がだめになって、介護が母一人では無理となり戻って行ったんです。義妹は二人とも嫁いでしまいましたから。僕が二十八歳の時で丁度結婚した時だからよく憶えているんです」

すると桐子は明子が結婚した翌年に小田原に引き揚げて行ったのだ。四季野公園の情景が思い出され、もう何十年も経ってしまったと思った。

平山は何の感傷も感慨もないようであった。今、現在しかないように見える。

「平山さんは、どういうお仕事をしていらしたんですか」

明子が訊くと、はつとなつて顔を上げた。

「商事会社にいたんです。私の所は六十人ぐらいの支店だからまあ中企業かな、大手ではない」

平山は回顧する風の顔となり急に饒舌になった。

「いやあ、熾烈な商売だった。四十年ほど前にコンビニが進出してあれで苦労した。あしたどう転身するか、できりきり舞いでした。同業者間の肚の探り合いが凄まじくて。メーカー招待の一泊旅行とかゴルフ・コンペとかで同業者が顔をつき合わせるわけですが、この時は向こうの動きを掴かむ。こっちは気取られまいとして緊張の連続でした。今ならネットで情報を得られるかもしれない。僕はその頃課長のポストにいたから逃げられなかった。ずっと胃潰瘍を患って、いつも車を走らせる道なら、あっちのどこにトイレがあつて」

あ、失礼、という目で明子に詫び、すぐかまわずに続けた。

「こっちはどこって、みんな憶えていた。つくづくメーカーはいい。生産者はいいい、って思いましたよ」

平山が顔をピクピクと引きつらせている図が想像される。平山は一息つくと言調が変わった。

「四十年働いた。それからこうして二十何年か遊ばせてもらっている。老人は遊ばせてもらっているんです。僕の前の世代の人たちは戦争に刈り出されて命を落したり空襲で家を焼かれたりした。戦死した夫をいつまでも慕っている姉を見るのは辛かった。遊びながらこうしていいのかなと思うことがあります」

平山は笑顔になり、今度はそちらのことを訊きたいというように明子を見た。

「山根さんの所はタイル屋さんだそうです」

「ええ、タイル工事の会社でした。親の代から九十年続いてやっていたのですが子供が娘一人で嫁いでしまったから廃業しました。私が嫁いできた時は家族が八人で、以前は農家でしたから敷地も広く家も大きかったけど貧乏でした。私は明けても暮れても八人のめしたき婆さん、夜ははだし足袋のつぎはぎでした。家族関係のいざこざが絶えない。でも、そのうちに義弟が独立したり義妹が嫁に行ったり義父母が亡くなったりで今は私たち二人だけになってしまいました。娘は私の出た学校に入り中学校に勤めて同じ教員と結婚してやっています。義父母の三十三回忌とか五十回忌をやると、みんなが集まってきた飲んだり笑ったりします。昔のこと、たいていの事は忘れているんですね。この年になると自分も記憶が薄れて気にならなくなっているわ。いつまでも憶えているのは戦争とか災害で亡くなった人のこと。理不尽な死に方をした人のことは忘れられない。四季野公園で餌をやっていた桐子さんを思い出します。懐かしくて涙が出ます。私と別れる時、『自分を見失わないようにね』と言ってくれたんです」

平山は黙りこんで聞いていた。笑いのない顔になっている。

ふと、『ラスト・オーダー』の曲が変わった。明子は耳を立てた。この店だったのだな、と思う。

「ラストオーダー もう一杯だけさ
しゅうでんも行ったから
ラストオーダー もう一杯だけさ
人生は時刻表じゃない」

明子は急に明るくなった声で言った。

「これ、『ラスト・オーダー』、って歌なんですね。私、この歌を聞くと、私のラスト・オーダーは何だろうと考えてしまう。何十年も忙しい忙しいで終わってしまった。あと、もう一杯、って言うのが甘くて刺激的でなにか誘われるわ。私のあともう一杯、って何だろうと思って」

平山は苦笑した。

「これは飲み屋の歌ですよ。もう一杯飲んで下さいと言っているだけのことですよ」

えーっ、と明子は大きな声を上げた。次の瞬間、おかしくてならなくなった。この人が桐子の弟だなんて、ああ、おかしい。ほんと、この人らしい。笑いがあとからあとからこみ上げてくる。平山は怪訝な顔で眺めていた。